

# 写った写真から 写した写真へ

日本風景写真協会

## 神奈川支部旗揚げ

共通の趣味を持つ人々が集い、新しいものを創造する。ひとりででは得がたいものを、みんなで共有できたら、写真表現の世界はきっと、もっと広がるはずだ。

撮影／加藤 裕、石村雅仁(編集部)



### 中村 守さん

神奈川支部・支部長の中村さん。近年はテーマを富士山に絞って活動中で、ひと月の半分以上は撮影に出かけている。「富士山を撮るときはあまり動かないから、たまに歩くのも、辛い」と言いつつも、フィールドに出れば、さすがに健闘。

京都にその本部を置き、プロ・アマを問わず多くのネイチャーフォトを愛する人たちがそれぞれの支部で活動している日本風景写真協会。その神奈川支部が発足されたニュースは弊誌40号でもお伝えしたとおりだが、つい先日、初めての撮影会が東京・奥多摩で行われた。当日、神奈川県の各地から「J奥多摩駅前に集まった17名が、発足間もないというのに名を揚げた」と。会員は、自然風景を撮っているという最低限の「決まりごと」とのみで集った人たち。まだ立ち上がりたばかりの支部のため、取り急ぎ代表を選出し、例会や撮影会を役員が分担で担当するということを決めただけである。もちろん写真クラブや撮影教室でいうところの「先生」も不在だ。

にもかかわらず、栄えある第一回目の撮影会にごぎつてしまった。朝の奥多摩駅前で、代表の中村守さんが、この日を迎えるにあたって参加者全員にうれしそうに挨拶し、また参加者たちも快く分かち合っている様子が、とても心地よい。その後、そこから車で30分。日原鍾乳洞先の深谷に到着すると、各々が自由に散らばり、いつもそうしているかのように、フリンダーを覗き合ったりしている。会員の中には、もちろん写真歴の浅いものも、多くは自分が求めているテーマも、表現の方向性も明確なハイアマチュアの人たちだろう。すでに写真の腕も十分にあるはずだ。それなのになぜ、自分の撮影会や創作活動の時間を、このたぐいの支部や上げや撮影会開催に惜しみます費やしているのか。しかも出てくると間もないにもかかわらず。

撮影の邪魔にならないよう、しかしその動き方に興味を持って隣で立つていて、その人、野口寛徳さんが声をかけてくれた。長靴姿で、沢の中まで入って撮影している。世間話のあと、ちよつとし写真談義に象の口だった。「今日は光線もベストでないし、紅葉具合もよくない。チーフに仕立てる眼力があれば、人に訴える写真ができるんだよね」と。例会の幹事である野口さんが写真に求めているものは訴求力かという風景でいうと、たどれば画面の向こうに入っていくという思いを、見る人に誘引する力かということ。また、画面やタイトルといった、いわば「給解き」が撮り手側にも見る側にも、すぐ「マジネーション」でできないものは、その訴求力が弱いに違いないと、「写った写真」から「写した写真」へ。同じ被写体でも何かに見せかけるように、または擬似的な想いを込めるように切り取る。それは意思を持ちほじめる。素直に「表現しよう」とすれば、それは何ら難しいことではないと、野口さんは付け加えた。

例会には会員それぞれが最低限2しにプリントした作品数点を持ち寄り予定だという。同じ時間、同じところで撮影し、参加した全員の複数の眼力か、お互いの作品を確認し合うのだ。表現しようという意思がそれぞれに現れは、モチベーションもそれなりに写真となつて訴えてくれるし、合いながらも新鮮な驚きを求めるこの会の姿に、僕自身も爽やかな驚きを感じずにはいられなかった。

(編集部・石村)